



スクロール劇場 Ⅲ.

黒田清輝《桜島爆発図》

黒田は1914(大正3)年1月8日に、実父・清兼の病氣見舞いのため、久しぶりに鹿児島へ帰省した。そのわずか4日後に、歴史的な桜島の大噴火に遭遇することとなる。

ここでは、黒田の油彩スケッチを観ながら、噴火の様子を時系列でたどってみよう。



《噴煙》

最初の噴火から二日後の14日に鹿児島築港より描いた第1作である。13日に火口より流れ出た熔岩は、この日桜島西部の斜面を下っている。中腹より立ち上る煙や火口からの噴煙は風によって南側(画面右)に流されている。

「午後一同平之町に帰還し今夜同所に一泊す」

1月14日付黒田日記全文



《噴火》

さらに二日後の16日夕刻の第2作である。桜島西部の斜面を下った溶岩流は海中に流れ込んでいる。桜島の炎が空や海面にも映り込むように描かれ、右側からは黒煙が荒々しいタッチで迫り、異様な雰囲気を与えている。

「午後水雷艇鶉に便乗 谷口知事 大森博士等と桜島西北東方面を巡視す」

1月16日付日記一部



《溶岩》

さらに二日後の18日、南洲墓地の浄光明寺付近より遠望した第3作。この頃、海上の烏島は流れ出た溶岩によって包囲されていた。海上の蒸気や火口からの噴煙は強めの風によって南に流されている。

「今夜より配電す 之れが為 市街稍復旧の状を呈するに至れり」
1月18日付日記一部



《降灰》

翌19日、宿泊先の庭に降り積もった火山灰の様子が描かれている。画面全体が色味のない銀灰色で覆われ、鹿児島市内までもこの大爆発によって一変してしまったことをうかがわせる第4作。

「南洲寺 洲崎等へ廻はる 十二日付東京電報の配達を受く」
1月19日付日記一部



《荒廃》

それから4日後の23日、桜島に渡り、袴腰付近から望んだ光景を描いた第5作である。沿岸の樹林は焼き尽くされて煙が上がり、まさに荒れ果てた光景が広がっている。

「再び桜島へ赴く 同行十一名なり 堺 国友 五島 山下 岩山 大牟礼 梅北 杉本 外に有盈及敏子」
(鹿児島の洋画家たちの名も見える) 1月23日付日記一部



《湯気》

この作品のみは制作日が定かたなく、流れ出た溶岩が海面まで達し、盛んに湯気を上げていることから、噴火から沈静までの途中であることしか分からない。自然の一瞬の表情を、細かなタッチで捉えようとした瑞々しい作品である。

この6点連作は、いったん同郷の地震学者今村明恒に贈られたが、後日その遺族の方から鹿児島市にまとめて寄贈されたといういきさつがある。